FUTURE EVENT

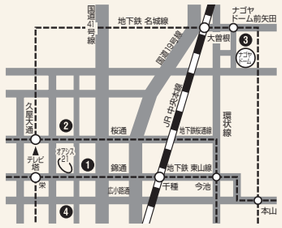
# 卒業制作展のお知らせ

## 第32回 名古屋芸術大学卒業制作展

美術学部絵画科・美術文化学科・デザイン科
**愛知県美術館ギャラリー** ---------- map❶
**2005年3月2日(水)➔3月6日(日)**
**10:00➔18:00（金曜日は20:00まで）**

映像作品
**セントラルアートギャラリー** ---------- map❷
**2005年3月2日(水)➔3月6日(日)**
**11:00➔19:00（日曜日は17:30まで）**

美術学部造形科・版画選択コース
**名古屋市民ギャラリー矢田** ---------- map❸
**2005年3月1日(火)➔3月6日(日)**
**9:30➔19:00（日曜日は17:00まで）**




## 第9回 名古屋芸術大学 大学院美術研究科修了制作展

**名古屋市民ギャラリー栄** ---------- map❹
**2005年3月1日(火)➔3月6日(日)**
**9:30➔19:00（日曜日は17:00まで）**

**第32回 名古屋芸術大学卒業制作展記念講演会**

# 細川護熙

茶陶に惹かれて……晴耕雨読の日々

**愛知芸術文化センター12階**
**アートスペースA**
**2005年3月4日(金)**
**19:00➔21:00**
**主催：名古屋芸術大学**
**お問い合わせ**
芸術文化交流室
TEL 0568-24-0325（代表）
※受付は終了しました。

## 2➔5月 EXHIBITION SCHEDULE　A&D アート&デザインセンター 展覧会スケジュール

| | |
|---|---|
| 愛・地球博西春町フレンドシップ事業グループ・サルバドール展 | 2月21日(月) ～ 2月26日(土) |
| 春期休館 | 2月27日(日) ～ 4月 7日(木) |
| デザイン学部選抜レビュー展 | 4月 8日(金) ～ 4月13日(水) |
| 朝 目覚めて思ったこと | 4月15日(金) ～ 4月20日(水) |
| Cube: | 4月15日(金) ～ 4月20日(水) |
| 「days 2005」 | 4月15日(金) ～ 4月20日(水) |
| 名古屋芸術大学退任教員展 | 4月23日(土) ～ 5月18日(水) |
| FROM REMISEN ; Leif Draeby & Gunner Klenke展 | 5月20日(金) ～ 6月 1日(水) |

Open 12:00－18:00（最終日は17:00まで）日曜・祝祭日休館（4月29日～5月5日は休館）　【入場無料】どなたでもご覧いただけます。

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県西春日井郡西春町　tel.0568-24-0325　fax.0568-24-0326

交通のご利用
●最寄りの交通機関をご利用の場合名鉄犬山線〔地下鉄鶴舞線乗り入れ〕徳重駅下車西へ約1,000m徒歩15分。
※急行電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください。西春駅から北西2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります。
●自動車ご利用の場合
一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。名古屋空港から10分

## Steering committee MEMBER

**H16年度 アート&デザインセンター 運営委員会メンバー**

| | |
|---|---|
| センター長 | 神戸　峰男 |
| 委員長 | 高橋　綾子 |
| 副委員長 | 藤松　由美 |
| 委員 | 岩井　義尚 |
| | 瀬田　哲司 |
| | 須田　真弘 |
| | 池側　隆之 |
| A&Dセンター | 江坂恵里子 |

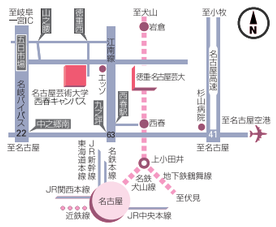
### ○ 編集後記

愛・地球博は環境万博とも言われています。前回のドイツ・ハノーバー万博でも環境を考慮したパビリオンが注目されていました。紙の建築で知られる坂茂が手がけた日本館は、リサイクルを強く意識したものでした。また、展示物を一切省き、国のアイデンティティをセンスよく表現したスイス館の空間は新しい万博パビリオンのかたちを示唆しており、とても印象的でした。近年世界中で起こっている自然災害を考えると、私たちは豊かさへの新たな価値観を求められているのだ、と思わずにはいられません。万博がそのきっかけとなることを期待します。（江坂）


Ble　Vol.8
発行日　2005年2月21日
編集・発行　名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535　愛知県西春日井郡西春町
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326
E-mail　adc@nua.ac.jp
URL　http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印刷　サンメッセ株式会社



2005　Printed in Japan
© Nagoya University of Arts, Art & Design Center


NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

# B!e

SPRING.2005 Vol.8
ART & DESIGN CENTER NEWS

## 特集 Study art 『芸術を学ぶ。』

### open up new ways of thinking and doing ...

芸術大学は、それぞれの個性を伸ばす環境を提供する「場」であり、多様な考え方を知る「場」です。大学で学ぶ理論や技術以外の何かは自分で探し出さなければなりません。多くのアーティストやクリエイターは、失敗から学ぶことの多さを語っています。制作する、研究をする、けれどもその評価は時に長い時間も必要なのですね。

ひょっとしたら「太陽を抱く男」だったかもしれない

洋画コースで二度目の２年生をしていたTさん、後期自由制作で何を描いていいのか迷って筆が進まない。

２年生をもう一度、そんなことはさせたくないという焦りが私にあった。そんな心配をよそに彼女はF50号で『地球を抱く男』というタイトルの絵画制作を始めた。

教室をひと回りして彼女の場所に帰ってきたとき「完成!!」といったのには驚いた。

日頃、私は待つを旨としてきたが、不覚にも制作時間にこだわって「完成とはいえないよ」といってしまった。その後その作品は酷いものになってしまった。

次に３年生の後期・自由課題、何を描いていいのか分からないというので、２年生のとき『地球を抱く男』を描いたけど、あのようなテーマは無いのかの問いに「ある、ある、いっぱいある。」といって持ってきた画帳には人を元気にさせるイメージやアクチュアルな学生生活の記録があった。

その後の彼女の制作ぶりはいまだに語り草になっている。

そして卒業制作で卒業賞を受けたときの大粒の涙と同級生の拍手は忘れられない。

翌年、ギャラリーの企画で個展ができるという付録がついた。

待たなくてよかったのか、待つべきだったのか、いずれにしても救われたのは私だった。

森　真吾　美術学部教授

## 放送部 - POLLEN

展覧会期中限定の有線放送。日替わりゲストと日替わりDJのトークをリスナー／観客は青空の下で聞いていました。放送は有線のため、毎日実行委員会が長いコードがつけられたスピーカーを学内に設置することから始まりました。

## パフォーマンス - POLLEN

やはり展覧会期中に行われた様々なパフォーマンスの一部。中庭の観客を取り込んだ作品、ボックスの中で完結する作品、限られた空間をそれぞれが工夫を凝らし、演出していました。

## 留学生による料理バトル

学内の茶室とキッチン工房を使って本学留学生による料理対決。
エスニックあり、フレンチあり、スパニッシュあり、コリアンあり、前菜からデザートまで5カ国の料理が並べられました。残念ながらジャパニーズはなしでした。

特集 Study art

# But is it art?

アート&デザインセンター界隈では展覧会に合わせて、
あるいは突発的に、様々なハプニング（パフォーマンス）が繰り広げられます。
芸術大学ならではの不思議な出来事も
すべて作品につながっているに違いありません。

## 甘くて旨い 古新聞屋さん現る!?

芸祭期間中に出没していた石焼古新聞売り。古新聞を買うと甘くておいしい石焼き芋がついてきます。主役はあくまでも古新聞です。どこかで見かけたら声を掛けてみてください。

## SACUK
(Society Against Cutting Up Kimono)

英国人女性アーティスト2人の企画によるパフォーマンス。現代日本の生活の中に息づく伝統を「着物」を通して表現した作品。洋画コースの学生3 人が象徴としての「着物」を纏い、演じました。

EXPO 2005

まもなく開幕の『愛・地球博愛知万博2005』では多くのアーティストたちも参加しています。アートプログラム「幸福のかたち」では、本学の学生たちもコスタリカ出身のアーティスト、フェデリコ・エレーロさんの作品、「World Map」の制作をお手伝いしました。
http://www.expo2005.or.jp/jp/A0/A5/index.html

# トピックス TOPICS レポート

## 中澤英明「子供の顔」

**2004年10月8日～12月5日**
**愛知県美術館　展示室6　テーマ展／名古屋市**

子供の顔　クマ

愛知県美術館の展示室6は、しばしばテーマを設定した小企画展が行なわれる小ぢんまりした部屋だが、昨秋ここで中澤英明の「子供の顔」展が開かれた。

この会場をうめつくしていたのは、4号大から10号大の画面にテンペラと油彩の混合技法によって描かれた幼児から小学校上級くらいまでの男の子や女の子の顔、しかも一様に真正面向きの子供の顔であった。それ以上に私にたじろぎを覚えさせたのは、こちらをひたと見つめる多くの子供の目であった。私がたじろぎを覚えたのは、おそらくは、彼や彼女らの目に宿る無垢なるもの、それが長らく社会の通念やルールなどと折り合いをつけて生きてこざるを得なかった結果わが身にまといついた垢を思い起こさせもし、あるいはまた彼や彼女らの目に感じる何らかの訴えかけに本質的には応えることのできない無力さに気づかされたからであろう。

正直なところ、私は会場を出るときいささか重い気分にとらわれていた。ついで、私の想いは「子供の顔」を何年にもわたって描き続けている作者自身に向かった。

美術学部美術文化学科教授　浅野 徹

## 学生たちの“はじめての出会い”
### ～名古屋ボストン美術館との共同教育プログラム～

**2004年10月2日～2005年2月20日**
**名古屋ボストン美術館／名古屋市**

プチことばあそび

「はじめての出会いFirst Contact“アメリカンアートにこんにちは!”」は『オキーフとその時代』展のために名古屋ボストン美術館と共同で開発した教育プログラムである。プログラムの対象になった「レーンコレクション」は20世紀前半の抽象的な表現を代表するアメリカンモダニズムの作品群である。来館者がはじめて絵に出会い、その感動や印象を大切にし、さらに画家の目と心になって新たな物の見方を発見することを目的に、アートエデュケーションの授業で試行錯誤が始まる。まず学生たち自らの視点で作品を解釈しプログラム作成を試みる。その提案された内容は担当学芸員との話し合いによって幾度かの改善が加えられ、徐々に教育普及プログラムへと明確な姿になっていく。セルフガイドやワークシートも含め、「めかくし探検隊」「ちゅうしょうパズル」「ことばあそび」など、学生たちは10種類のプログラムを作成する。10月から翌年2月までの5ヶ月間に月2回の割合で実施するが、毎回実践のたびに‘新たな覚悟’と今度は上手くいくという‘ささやかな希望’と、やっぱりあそこが…という‘大きな反省’が学生たちの間でくり返される。一行の文章で美術の楽しさを表す広報ちらしのテクニックや、人前でわかりやすく伝える話術の難しさに、‘言い訳’などきかない現場のシリアスさを、学生たち全員が肌で感じる。一方、オープニングで寄贈者の夫人のソンドラ・レーンさんに会い、プログラムの意見を直接聞けるという貴重な経験もする。学生自身にとっても様々な“はじめての出会い”だったのである。　美術学部美術文化学科助教授　前田ちま子

## 新花論

**2004年12月25日～2005年2月6日**
**東京都写真美術館／東京都**

昨年12月25日から2005年2月6日まで東京都写真美術館で開催された、日本の新進作家vol.3「新花論」に参加した。　トラディショナルなテーマともいえる<花>を、4人（赤崎みま・銅金裕司・鬼頭健吾・櫃田珠実）の出品作家が独自の視点で表現するというのが展覧会の趣旨であった。

植物と環境の関係を、アートワークに展開する植物生理学者である銅金は植物の表面に発生する微弱な電流をメディアや音声に変換する。その装置が自動的に作動する実験室のような明るい部屋の様子が、ピンホールカメラの原理で周りを取り巻く部屋に非常に曖昧に映し出される。赤崎は枯れてしまった植物の実や花を撮影し、光の効果で、あざやかな色を放出する不思議な写真作品。　名古屋芸大を2001年に卒業し、2003年に京都市立芸大の大学院を修了したばかりのまさに新進作家である鬼頭の作品は、5つのプロジェクターからの<移行する映像>が展示スペースの中の壁や床を移動する。部屋の真ん中に、小さな鏡の集合体装置が3台回転してその映像を反射し2次、3次反射を生み出し、眩暈と錯覚で視覚の可能性を広げる。筆者の作品は3人の作家が囲まれた個展形式のスペースで展示するなか、スケール感のでるオープンスペースで　イメージの奥に広がるGardenをつくる。デジタルプリントの巨大なバラの咲く庭と微かな花の匂いで虚構と現実を行き来する。　4人の作家の<新花論>はテクノロジアートを、大きく反映するものとなったが、<花>の存在は、いつの時代もかわらず生命と美の象徴にはかわりないようだ。　美術学部非常勤講師　櫃田珠実

## コドモ式 advantage #02 “kids style”

**2004年12月15日～23日**
**国際デザインセンター デザインギャラリー／名古屋市**

「ここ数年、こどもをとりまくマーケットはだんだん飽和に向かっている。過剰な愛はこどもをきちんと育てることができるのだろうか?今の社会は決してこどもにとって素晴らしい環境とはいえないが、子ども自身の『生きる力の獲得』を望むのであれば、この社会の中で学ぶこと、生きることを教える必要があるのかもしれない。その『子ども力』を引き出すデザインがどこかにあるような気がする。すべてはバランスである。環境なのか、モノなのか、愛なのか、お金なのか。こどもに本当に必要なものは何か。デザイナーにできることは何か考える。」この問いに対して、6組のデザイナーに現時点での回答として作品を展示して頂いた。その中で、「谷野大輔＋竹内直樹＋壁谷荘介」のユニットはコンクリート製の「ポチ袋」をデザインした。ポチ袋の型の中に生コンクリートを流し込み、その中にお年玉を封入する。それをもらったコドモは、堅いコンクリートと格闘しながら、その「対価」としてお年玉という「現金」を手に入れ欲しいものを買う。モノがあふれる今、モノを手に入れることの重みや、送り出す側の責任について考えさせられる作品であった。商業主義にのっとった作れや売れやの考えからではなく、モノを与える背景に本来あるはずの「与える側」の哲学が、今後の一つのキーとなることを示唆する一つの回答であったように感じる。今後も、コドモに関わるデザインについての様々な価値観を、社会にプレゼンテーションしていけたらと思う。

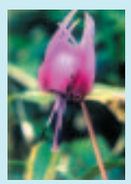
※国際デザインセンター主催の「ADVANTAGE」シリーズは、若いデザイナーの発想と作品を紹介する企画展である。次世代のデザインを担うであろう若手デザイナーや学生たちが、展覧会コンセプトから出品者のセレクト、作品制作、会場構成、運営までのトータル・プロデュースを行なう。

デザイン学部非常勤講師　稲波伸行

# RELAY ESSAY

## 芸術と科学

**山田 卓三**



私は本学にお世話になるまでは芸術とは全く縁のないと思われている生物を対象に研究してきました。しかし、本学に来て、様々なアートやデザインを注意して見てみますと、生物をはじめ自然が深く関わっていることに改めて気づきました。そこで講義はなるべく野外で行い、学生と共に自然の本当の姿を観ることにしました。

草花など野外から切り出して部屋に持ち込むと天地が変わってしまいます。ユリやツツジなどは蜜標（ハニーガイド）の位置で天地の補正ができますが、花によっては分かり難いものや、光や温度によって開いたり閉じたりするので、その様相が変化してしまうものがたくさんあります。動物も同じです。さらに生き物に限らず時間と共に変化する影や天空の事象も同じです。

美術の展覧会に行って、作品をみているとその不自然さが気になってしまいます。蜜標の位置と雌しべの柱頭の向きがずれていると不自然です。また、松上の鶴のようなキメラも気になります。鶴は地上で生活しているのに樹上で生活するサギやコウノトリをツルと思いこんで地上でスケッチした図を樹上にはめこんだものです。あるいは、時間や場所により影や月の位置や形が違うのに適当に描いているものなどなどです。

以前小麦の研究で知られる木原均先生とお話ししている時に、これに関することが話題となり、レオナルドダビンチの作品にはこうした「うそ」がないが、一つだけ見つけた。それは壁に掛かっている紐のよりが上下で違っている、というのです。当時、先生は朝顔のつるの巻き方を世間では左まきと言っているが、これは動物やねじなどの巻き方では右巻きだから、統一しないと誤解を招くとその統一の運動をされていた頃でした。

こうした見方は邪道で、アートやデザインだからそんなことはどうでもいいことかも知れません。しかし、東山魁夷の竹林の絵などこれは孟宗竹だとその竹の種類まで分かるのはまさに芸術と科学の融合で素晴らしいと思います。ヒガンバナを見て「裸にて　炎と化すや　曼珠沙華」といった中 勘助の文芸も同じです。科学の表現を越えた芸術です。

音楽学部教養部会　特別任用教授（生物学）